

No.23



2011.12

(目次)

- 巻頭言
最終年度を迎えたグローバルCOE 副研究科長 子安 増生 2
- 研究ノート
教員から 教育方法学講座 教授 やまだようこ 3
院生から 心理臨床学講座 博士後期課程2年 西浦 太郎 3
- 社会人院生から . . . 教育科学専攻(専修コース) 修士課程1年 大野 秀樹 4
- 留学生から 比較教育政策学講座 修士課程1年 廖 于晴 4
- 臨床教育実践研究センターから
. 臨床心理実践学講座 教授・臨床教育実践研究センター長 松木 邦裕 5
- グローバルCOEプログラムから
. 教育学講座 教授・ユニットD 鈴木 晶子 5
- 教育実践コラボレーション・センターから
. コラボレーション・センター関連 特定助教(特別教育研究) 吉田 正純 6
- 事務室から 事務長 吉井 晃 6
- 図書室から 専門職員(図書掛長) 梶山 暢子 7
- 諸記録 8~9
①おもな出来事 ②オープンキャンパス2011 ③入試結果 ④学位授与件数
⑤人事異動 ⑥外部資金受入
- 諸報
新任事務職員紹介
訃報 10

巻頭言

最終年度を迎えたグローバルCOE

副研究科長 子安増生



平成19年度から5年間の計画で文部科学省・研究拠点形成費補助金を受けて、グローバルCOE「心が活きる教育のための国際的拠点」(拠点リーダー・子安増生)に基づく研究活動に本研究科のほぼ全教員と多くの大学院生が参加してきたが、今年度一杯で予定通りすべての事業を終了することとなった。

これまでの研究活動の成果は、ウェブページ(<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/>)において公表している。平成19年度～22年度に本拠点が主催または共催して開催した行事は、講演会62回、シンポジウム26回、ワークショップ19回である。国際的研究拠点の形成事業という点では、イギリスのロンドン大学教育研究所およびランカスター大学、ドイツのベルリン自由大学、中国の中国中央教育科学研究所および北京師範大学などと連携する国際シンポジウムを活発に実施してきた(いずれも日本国内および相手国で開催)。このほか、慶應義塾大学グローバルCOEと連携し、共催シンポジウムを毎年実施している(京都および東京で交互に開催)。2009年6月には、研究成果の一端を示すものとして、『心が活きる教育に向かって—幸福感を紡ぐ心理学・教育学』(ナカニシヤ出版)を刊行した。

このようなグローバルCOE拠点の研究活動を通じて、教育学研究科の研究は一層活性化している。他方、拠点の教育活動についての実績の概略は以下の通りである。

1. 専攻を超えた教育体制:専攻や課程の壁を越えて幅広い視野を持つ研究者を養成するために、カリキュラム編成と論文指導体制の整備を行っている。心理学分野においては、教育学研究科教員は文学研究科や人間・環境学研究科などの教員と連携して、「心理学概論」、「心理学初級実験実習」などの学部科目を共同で運営し、その他の学部科目及び大学院科目においても拠点教員の密な連携のもとに授業を運営している。

2. EXラボによる有機的連携:心理学・教育学の大学院生(特に修士課程1年生)が共同して参画し、他分野の研究室相互訪問を目的とする“Exchanging Laboratory Program”(EXラボ)を平成20年度より新たに開始した。各年度において40人程度の修士課程1年生がEXラボに参加してきた(文学研究科

および人間・環境学研究科の大学院生を含む)。

3. 国際教育研究フロンティア:外国人講師が実施する外国語による授業科目として、平成20年度から教育学研究科の授業に研究者養成コース共通科目「国際教育研究フロンティア」を新設した。授業担当は、英国・ロンドン大学教育研究所教授、ニュージーランド・オークランド大学准教授、中国・中央教育科学研究所研究員、中国・北京師範大学准教授、韓国・ソウル大学校教授、本拠点・ドイツ人助教などの錚々たる研究者である。

4. 大学院生の研究の国際化:大学院生の世界的研究機関との学術交流を支援し、国際学術誌投稿と国際学会発表をサポートしている。平成21年度から、国際学術誌への投稿を支援するため、外国語論文校閲補助費の公募を行っている。

5. 博士課程学生への競争的研究経費支援:大学院生に対して、毎年度海外留学資金、院生養成プログラム研究費、研究開発コロキアムの3種類の競争的研究経費を用意し、公募と選考をおこなって支給してきた。

6. 大学院修了後キャリア形成プログラム:大学などの研究機関だけでなく、官庁の心理学・教育学関連職や、シンクタンクなどの民間企業、各種医療関連職などへの就職をサポートするため、平成20年度から毎年、民間の人材開発担当者ほかを講師に招いて講演会を実施した。

7. 若手研究者による国際ワークショップ:2011年1月に世界各地の大学院生・ポスドクを招聘して、国際ワークショップ「International Young Researchers Workshop "Knowing self, knowing others"」を開催し、世界のトップレベルの院生の活躍を実地に見聞し相互に交流する機会を設けて、拠点院生の研究への動機づけを高めた。

以上のように、グローバルCOEの教育活動は、幅広い視野を持った国際的に活躍できる有為な人材の育成という点において、本研究科の大学院生の教育にとって極めて重要な役割を果たしている。

このような成果を今後の本研究科の発展にどのように生かしていくかが、当面の大きな課題となっている。

研 究 ノ ー ト

教 員 か ら

教育方法学講座 教授

やまだようこ



震災に出会って、私には何ができるだろうかと、思いめぐらす日々がつづいています。今こそ、語りやことばの力が試されているような気がするからです。

私の専門は、生涯発達心理学です。ひとが人生をどのように語るか、ライフストーリーやナラティブ研究を行ってきました。「語り」を研究することは、自分から離れた研究対象を調べるのではなく、「語る」というアクチュアルな共同実践を相手と一緒にやっていくことです。生きることと、語ることは、切り離すことができません。

震災のときに、被災者の人々が語ることばに耳をすましてみると、はっとさせられることが多々ありました。

ふるさとが一瞬にして津波に飲み込まれた光景を見たあと、夜中に一睡もできないで非常階段の上にいる男性は、「空を見上げると、満天の星空が広がっていた。電気が消えた被災地の空は、透き通るように澄み渡っていた。電気のない時代には、こんな夜空を見ていたんでしょかね」そう言いながら、みんなで空を見上げたといひます。

もう一度、電気のない世界にもどって、この世のありようを考え直したくなります。それにしても、恐怖と寒さで震えて眠れなかった夜のことを、こんなふうに回想できるなんて、素敵なことです。

私たちは、現実起こった出来事を変えることはできませんが、それをどのような「物語(ナラティブ)」にするか、経験の組織化と意味づけ方は変えることができます。物語によって未来をつくっていくこともできます。

ある詩人は「明けない夜はない」ということばをツイッターで繰り返しつぶやいていました。そのようなことばを口にしながら、前向きに生きる被災地の人々の姿は、逆に私たちを励まし、共に生きていく力を生み出してくれます。

悲劇のどん底からでも、すべてを喪失しても、私たちは人間にとって何が大切なのか、どのように生きるべきか、人間の強さについても弱さについても、たくさん学ぶことができるでしょう。

院 生 か ら

心理臨床学講座 博士後期課程2年

西 浦 太 郎



私は編入学で教育学部に入學し、その後、大学院に進学し、今年で七年目になります。大学院では毎日、臨床心理の面接に励んできましたが、常に人と会う事の難しさを感じています。自分に少しでも慢心があると、それが一気に面接関係に反映されてしまいます。また自分がいくら多くの人と会い、何年、臨床経験を積んで、様々な知識を得ても、面接の場が目の前にいる一人の人の心に響くものでなければ、何の意味もないと痛切に感じます。臨床心理の面接は、単純に経験だけでできるものではないと感じます。その意味で、経験はないけれども、一生懸命、人の話を聴く修士一年目のあり方は、人と人が会う上でとても大切なことだと最近、よく思います。

先の東日本大震災では、多くの方が被災され、残念ながら、多くの方が亡くなりました。亡くなられた方々に心からご冥福をお祈りいたします。被災者の方々や、被災地域の支援に携わる

方のために、心理臨床系の全ての講座にまたがり「こころの支援室」が立ち上げられました。そこでは、教員と院生が電話相談や個別相談を行い、また京都に避難されている被災者の方とお会いする活動を行っています。私も避難されているご家族の方々とお会いする機会がありました。最初は、独特の張り詰めた空気があり、一体、どうなるのだろうと不安になりましたが、子ども達と一緒に遊び、周囲に笑い声が聞こえると、それまで硬かった親の表情が緩み、徐々に色々な話をされていったのが印象的でした。人は大切な人が大丈夫だと思えて初めて、自分の不安を語れるのだと感じ、家族の絆の深さを感じました。今後も、微力ながら自分の専門性を生かし、できることを少しずつ模索していきたいと思ひます。

社会人院生から

教育科学専攻（専修コース）修士課程1年 大野 秀 樹



まさか京都に8年も住むことになるとは、しかも30年も間を開けるとは…、昨年初めには夢にも思っていませんでした。

私は京都大学に入りたくて、理学部に落ちた浪人時代から京都で過ごし、1年後幸いに文学部に合格してようやく学生になれました。1970年代後半のことです。文学部では史学科で国史学を専攻し、日本現代史を勉強しましたが、それよりもサークル活動で友人が多数できたのが印象に残っています。学部卒業後、本当は研究者になりたかったのですが、結局あきらめました。その時大学院に進んだ友人たちが大学教員として活躍しているのを見るにつけ、もっと勉強をしておけば良かったと今でも後悔しています。

1981年に文学部を卒業した後は、岐阜県の高校教員（地歴公民科）として勤務することになりました。豪雪の飛騨で純朴な生徒と過ごし、都市部の新設校で管理教育の洗礼を受けて髪の毛が真っ白になり、商業高校で心身を休めた後、県で2位の進学校に10年間も勤務するなど楽しく過ごさせて頂きました。自分の教員歴で最も印象に残っているのは5校目の経験です。この

学校は平野の縁にある周辺校で、この時期特に荒れていて、再建するため「連携型中高一貫教育校」を導入するようになっていました。進学校のめるま湯から周辺校の厳しい職場に変わっただけでなく、教務主任として準備作業に忙殺され、日々が戦いでした。しかし、後から見るといい思い出に変わっています。6校目でも教務主任などを務めました。自分の人生を振り返ってみて「果たしてこのまま定年を迎え、静かに消えていくのが良いのか」と真剣に悩みました。「運命に逆らいたい」との思いで、大学院を受験したら、案に相違して幸いにも合格させて頂きました。休職が認められなかったため、教員は退職しました。

以上の経過から大学院では、高見教授のご指導の下、「中高一貫教育の歩み」を広く第二次大戦後から明らかにしていきたいと思っています。専修コースなので、また来年には人生の選択をしなければなりません。できれば研究を続けていきたいと思っています。

留学生から

比較教育政策学講座 修士課程1年 廖 于 晴



研究生として京都大学の比較教育政策学講座で勉強をはじめからそろそろ二年になりますが、入試論文を書いた頃のことから今でもとても印象に残っています。

入試論文は台湾の高等職業教育機関の位置づけや制度、政策の特徴を明らかにしようとするものでした。ところが、「台湾人として日本に留学して、なぜ台湾のことを研究するのか」、また「台湾について研究するなら台湾で研究したほうが良いのではないか」というような疑問がありました。しかし、いざ論文を書き始めると、その疑問に対する答えも見えてきました。論文のキーワードに「高等職業教育機関」があるのですが、この言葉は台湾人にとってまったく違和感のないものです。ところが自分の研究内容を説明しようとしたとき、日本人はこの言葉を理解できないので、とても驚きました。というのも、日本には台湾と同じような「普通高等教育機関」から特化した「高等職業教育機関」というものがないからです。このとき初めて、日本で台湾のことを研究する意味を理解しました。それは、同じ研究テーマでも国とその文脈

が違えば内容も違ってくる、つまり、自分の研究は日本の観点から台湾の教育を考えるもので、単に台湾についての研究ではなく、日本の文脈に応じた台湾の研究なのだという事です。自分の盲点を発見し、視野を広げられるのは比較教育学の醍醐味だと思います。

このような研究上の啓発だけでなく、知識、さらには生活の面でも先生方、先輩方、同級生にはいろいろとお世話になっています。こんなにおおざっぱな私を大目に見てくださるみなさまにはたいへん感謝しています！教育学研究科での留学生生活はきっと人生の中で最も幸せな時期の一つであると思っています。生活上不便なことや慣れないことはまだまだありますが、やりたい研究ができ、読みたい本が読めるうえに、いろいろなすばらしい人と出会えることは大きな幸せです！

臨床教育実践研究センターから

臨床心理実践学講座 教授・臨床教育実践研究センター長 松木 邦裕



臨床教育実践研究センターは、臨床実践、教育、研究という多機能を有機的かつ精力的に展開してきました。本稿ではそれらの活動内容と近況をお伝えしたいと思います。

臨床実践活動として、心理教育相談室における心理相談があります。解決困難な心理的課題を抱えた人が顕著に増えていることが現代社会の特徴の様相です。相談室においては、日々、そうした来談者たちに真摯に向き合う、まさに臨床心理学の中核的実践を私たちは積み重ねています。今日のもうひとつの実践活動は、こころの支援室を中心に行われています。東日本大震災で被災された方たちやその支援者に向けた心理的援助です。電話相談や面接相談の体制を整備し、警察や消防といった公的機関との連携も進めています。そのアウトリーチとして、8月17日には、医学研究科人間健康科学系および宇宙総合学研究ユニットとの協働で、京都に来られた被災者家族への支援活動として「天体観測ツアー」を企画し、被災者のこころの添うかわりを心掛け、大変好評を得ました。さらなる支援も企画中です。

教育活動としては、ひとつに、教師・養護教諭・心理士等を対象としたリカレント教育講座を毎年開催しています。学校教育現場

に生じる新たな困難への理解と対応を検討する機会として高い評価を得ているものです。

これまでは2月の開催でしたが、参加者の利便を考慮し、来年度からは8月開催を予定しています。もう一つの活動、教育実践コラボレーション・センターとの共催で毎年開催している公開講座は、その15回目として、10月30日 Winthrop Burr 客員教授(前ハーバード大)による「うつ病の心理療法―「はかなさ」と「型」の国日本において」の講演と討論を行いました。Burr 客員教授の深い日本理解に触れる絶好の機会でした。また、大学における教育として、教員および心理臨床職から成る科目等履修生に向けた「現場実践ケースカンファレンス」の授業を行っています。履修生の増加が今年の特徴です。

最後に「京都大学大学院教育学研究科附属教育実践研究センター紀要」を1997年から毎年刊行していることを述べておきます。臨床実践に基づいた深い思索が産み出した論考を中心に編んでいます。本センターのさらなる充実こそが私たちの願いです。

グローバルCOEプログラムから 儀礼的行動のなかの幸福イメージ ―日独幸福感調査から

教育学講座 教授・ユニットD 鈴木 晶子



GCOEのユニットDでは、ドイツのベルリン自由大学歴史人類学学際研究センターと協力し、家庭や学校での幸福感や幸福イメージについて国際比較調査を行ってきました。家庭調査では、クリスマスと祝うドイツの家庭と、お正月を祝う日本の家庭それぞれに日独混成のチームが入り、参与観察やインタビュー、映像記録によるビデオグラフィーなどエスノロジーの手法を用いてフィールド調査を行いました。宗教・文化的背景は異なるものの、クリスマスとお正月は、家族が共に集い祝う点では共通しています。家族で祝う年中行事は、お祝いの特別な料理や飾り物、宗教的な儀式や決まりごと、贈り物の交換などさまざまな儀礼的な事柄から成り立っています。現代では、古い儀式は簡略化され、消費文化に染まり、家族での祝い方はすっかり様変わりしてきているのは日本もドイツも同様です。とはいえ、どの家庭も昔のしきたりをどこかで踏襲しつつ、家族構成や時代の流行に合わせて祝い方を変容させていっているその様は、それぞれの家族

ならではの祝いの形を模索し、つくり上げていっている過程であることが分かってきました。

今回の調査では全部で延べ6つの日独の家庭に入りましたが、家族の幸福のイメージが、年中行事を過ごすなかで、家族相互による演技的な行動や振る舞いを通して生まれてくる様子が印象的でした。家族が集うことで、互いの絆を改めて確認することもあれば、逆に日頃、溜まっていた家族間のひずみが噴出してしまう場合もあります。幸福を希求することと幸福喪失への恐れとは紙一重。その双方がないまぜになりつつ、幸福のイメージが創りあげられていく様子を垣間見ることができました。この家庭の調査については、2011年10月に、「Glück der Familie」(家庭の幸福)というタイトルでドイツ語版がSpringer出版社から刊行されています。日本語版は2012年春にナカニシヤ出版から刊行の運びです。

教育実践コラボレーション・センターから

コラボレーション・センター関連 特定助教（特別教育研究）

吉田正純



教育実践コラボレーション・センターは、教育学研究科「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」の一環として、2007年4月に設立されました。教育現場から持ち込まれた具体的な問題に対し、研究分野の領域の枠を超えたより有機的な働きかけを行えるよう、組織的にコーディネートすることを目的としています。

本センターは、「学校教育改善ユニット」「新しい教育関係ユニット」「教育空間創造ユニット」「E.FORUM」の4ユニットを、活動の柱としています。「学校教育改善ユニット」では、京都市立高倉小学校や寝屋川市立田井小学校などと連携し、授業改善の取り組みを進めています。「新しい教育関係ユニット」では、京都市立洛風中学校など、新しい教育関係を生みだすことを試みている学校との関わりを進めています。「教育空間創造ユニット」は南山城村で「野殿童仙房生涯学習推進委員会」を立ち上げ、地域と大学による共同の学びの空間づくりを目指しています。

また「E.FORUM」は、学校や地域の教育改革を推進する、スクールリーダーの育成・力量向上のため、様々な研修を行っています。

2011年度は、6月14日に国際シンポジウム「アジアにおけるPISA問題」を開催し、陸璟氏（上海市教育科学研究院普通教育研究所副所長）、白淳根氏（ソウル大学全学入試部長）、楠見孝教授、杉本均教授にご報告いただきました。本年度はセンター5年目の最終年度であり、大学教員・大学院生と教育現場との有機的な連携を進めつつ、これまでの活動の目的や意義をふり返りながら、今後の活動展開について議論を進めております。本センターの活動にご支援・ご指導を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

事務室から

事務長 吉井 晃



東日本大震災で亡くなられた方々のご冥福と被災された方々にお見舞いを申し上げますとともに、1日も早い復旧・復興を願ってやみません。

私事ですが、昭和45年に京都大学に奉職し、滋賀医科大、国際日本文化研究センター勤務を経て、平成12年に管理職として米子高専、島根医科大（現島根大学医学部）で勤務し、平成16年から古巣の京都大学でお世話になっている。

京都大学では、深夜に及ぶ数度の総長団交、創立百周年記念事業、更に前任の基礎物理学研究所においては、民間からの寄附による国際交流ホールの建設及び元所長のノーベル物理学賞受賞記念行事の準備に携わったことが強く印象に残っている。良き仲間にも恵まれ貴重な数々の経験をさせていただいた。

平成21年4月教育学研究科に着任し早々、国立大学法人9大学教育学部長会議及び教育学部創立六十周年記念行事に係る諸準備、教育学部本館の耐震改修工事に伴う移転業務に追われたが、お蔭様で実に充実した日々を送ることができた。そして間もなく定年退職の日を迎えます。

この間、国立大学は「国立大学法人」に移行し、経営感覚・業務改善への意識が高まり、社会への説明責任が大きくなり、労務管理・安全衛生等の適用により業務が煩雑になった。そして特に法人化後は、一昔前の「人・物・金」から「金・物・人」へと意識が変化してきたように感じるのは私一人だけであろうか。組織は「人」

である。時の流れかも知れないが、そうであれば些か寂しい気がする。

今、京都大学では、平成24年4月の実施を目途に、構内ごとの事務組織の設置、サテライト化・集約化について鋭意具体的な検討が進められている。これは「社会保障予算の増大や震災復興財源の確保の必要性から、国の財政事情は非常に厳しく、国立大学法人は総人件費の抑制を引き続き求められ、更には運営費交付金の削減を視野に入れざるを得ない状況である。このような状況の中、京都大学が世界のリーディング大学として一層の発展を遂げていくためには、更なる大学の諸機能の強化が必要であり、この実現には事務改革が不可欠である。」ことが背景にある。

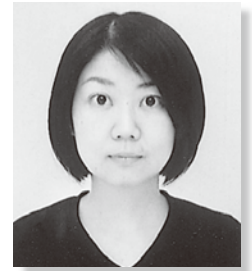
全部局長との「事務改革の方向性等に係る意見交換」が実施されたが、それらの意見を十分踏まえ、①学生の利便性 ②教員への教育・研究支援体制 ③事務の効率化・機能性のいずれもが低下することのないよう組織改編をすべきであることは言うまでもないが、重要なことは、効果的・効率的に機能する新しい事務組織にしなければならない。

学内、他大学における先行事例を検証・検討のうえ全学教職員の気運を高め、叡智を結集してそのような事務組織となることを願っている。

図書室から

専門職員（図書掛長）

梶山 暢子



2009年に始まった耐震改修工事に伴う一時移転、2010年5月の資料再配置と、目まぐるしく変化を遂げてきた図書室ですが、この9月に総仕上げともいえる博物館からの資料移転を実施しました。この間、休室や一部資料の利用停止などご不便をおかけして、大変申し訳ございませんでした。

これまでKULINEで「配置場所:別棟閉架」と表示されていた資料は申し込みの翌開室日の13時以降でないとご利用いただけなかったのですが、これらの資料がすべて、本館地下書庫に移りました（配置場所表示は現在の場所に変更済みです）。開架扱いのものはもちろん直接書架にアクセスしてご利用いただけますし、閉架扱いの資料については、これまでどおりカウンターで出納の申し込みが必要ではありますが、月-金曜日の9-12時、13-17時の間にお申込みいただいた場合、すぐに職員が出納いたしますのでお待ちいただく時間が格段に短くなりました。

今回移転したのは産業、芸術、語学、文学関連の図書と、文学部移管図書を始めとする特殊文庫類です。中には「文学部移管

図書（文学部教育学教授法講座よりの移管図書約6400冊）」「小西文庫（第9代総長小西重直博士蔵書、ヨーロッパの教育哲学に関する書籍類）」「高橋文庫（高橋俊乗博士（日本教育史）蔵書、教育関係以外に哲学・宗教関連の図書も多く含む）」「教育課程文庫（米国教育団体、連合軍総司令部（GHQ）、民間情報教育局（CIE）より日本政府に寄贈された米国の代表的な教育書・教育学書のほか、日本の教科書・学習指導要領等）」「フランス教育史文庫」「日本近代化研究会文庫」など貴重な資料が多く含まれています。

これまで幾度も別置や移転を経てきた教育学部図書室の資料群が一箇所にまとまって収蔵されるのはほとんど初めてのことでないかと思われます。古い資料も多く、修理や整理が必要なものの中にはありますが順次作業を進めておりますので、是非ともご活用ください。



諸 記 録

◆ 2011年5月～2011年10月のおもな出来事

【2011(平成23)年6月】

- 2日(木) 第34回グローバルCOE 主催講演会「Is language the key to reasoning?」マイケル・シーガル教授(英シェフィールド大学、教育学研究科本館)
- 9日(木) 第36回グローバルCOE 主催講演会「Gene regulation in the human brain」ターハン・カンリ博士(米ストーニー・ブルーク大学准教授、教育学研究科本館)
- 13日(月) 第35回グローバルCOE 主催講演会「Abstract conditioning is modulated by attention and consciousness」Tristan Bekinschtein博士(MRC Cognition and Brain Sciences Unit, Cambridge, UK、教育学研究科本館)
- 14日(火) 教育実践コラボレーション・センター主催 国際シンポジウム「アジアにおけるPISA問題」報告 陸璟氏(上海市教育科学研究院普通教育研究所副所長)、白淳根氏(ソウル大学全学入試部長)、楠見孝教授、杉本均教授、司会 南部広孝准教授、西岡加名恵准教授(京都大学芝蘭会館別館研修室1)
- 23日(木) 大学院教育学研究科、教育学部3年次編入 入試説明会(法経第四教室)

【2011(平成23)年7月】

- 9日(土) 教育学部同窓会
- 11日(月) 第37回京都大学グローバルCOE主催講演会「Modeling the psychological impacts of major societal changes and challenges: A new, integrative model」Robin Goodwin教授(英国Brunel University教授、教育学研究科本館)
- 15日(金) 第38回京都大学グローバルCOE主催講演会「東洋のパースペクティブ・西洋のパースペクティブ—視覚芸術、メディア、カルチュラル・プロダクツの文化比較研究」増田貴彦博士(カナダ・アルバータ大学准教授、教育学研究科本館)
- 23日(土) 教育実践コラボレーション・センター(教育空間創造ユニット)主催 「第6回風と雲の広場 科学と魔法の交差点」(京都府南山城村旧野殿童仙房小学校)
- 29日(金)～31日(日) 教育実践コラボレーション・センター主催 国際教育研究フロンティアB Woo Yong-Je教授(韓国・ソウル大学)開講(総合研究2号館)

【2011(平成23)年8月】

- 10日(水) 教育学部オープンキャンパス
- 17日(水) 宇宙総合学研究ユニット、理学研究科附属天文台、医学研究科人間健康科学系専攻、総合博物館、教育学研究科内こころの支援室主催「東日本大震災復興支援天体観測ツアー～空を見上げて～」(理学研究科花山天文台)
- 20日(土)～22日(月) 教育実践コラボレーション・センター主催 「2011年度E.FORUM全国スクールリーダー育成研修」講師 辻本雅史教授・西岡加名恵准教授・楠見孝教授・吉田正純助教(文学部新館第1・2講義室他)

【2011(平成23)年10月】

- 6日(木) 大学院教育学研究科、教育学部3年次編入 入試説明会(法経第四教室)
- 11日(火) 第9回グローバルCOE主催国際シンポジウム「International Symposium "Happiness"」(京都大学時計台記念ホールⅢ)
- 26日(水) 第39回京都大学グローバルCOE主催講演会「Hegels Bildungstheorie und die moderne Bildungsforschung (ヘーゲルの人間形成理論と現代の人間形成研究)」Lothar Wigger教授(ドルトムント工科大学、教育学研究科本館)
- 30日(日) 教育学研究科附属臨床教育実践研究センター主催教育実践コラボレーション・センター共催公開講座「うつ心の心理療法:「はかなさ」と「型」の国日本において」(京都テルサ第一会議室)

◆ オープンキャンパス2011開催



平成23年8月10日(水)、11日(木)の両日、「京都大学オープンキャンパス2011」が開催された。

本学部においては、8月10日(水)12時30分から実施し、387名の参加者があった。

当日は、辻本雅史学部長の歓迎の挨拶、楠見孝教授の模擬授業、授業担当教員との意見交換、各系の説明と質疑応答が行われ、会場は参加者の熱気にあふれた。また、終日、学生相談員が個別相談にあたり、参加者からは教育学部ではどんな勉強をするのか等の相談が寄せられた。

◆ 新任事務職員紹介（「 」内は本人の抱負）



訃 報 金 子 勉 准教授

金子勉先生は、9月7日逝去された。享年46歳。平成4年3月京都大学大学院教育学研究科修士課程修了、広島大学助手、大阪教育大学講師、助教授を経て、平成15年10月から京都大学大学院教育学研究科助教授（平成19年4月准教授）。

専門は教育行政学で、高等教育を主たる対象とされた。特にドイツの高等教育法に焦点を当て、その立法過程と政策内容の分析を通じて、大学の法的地位及び管理運営の変容に関連する規定の研究に優れた業績を残された。

～ 編 集 後 記 ～

「ニュースレター第23号」をお届けします。今年は、オープンキャンパスや入試説明会で、京都大学教育学研究科・教育学部に興味をもつ方々の多様な声を耳にする機会を得ました。そうした場で、この「ニュースレター」が配布され、教育学研究科・学部の生の声を未知の人々に届ける重要な媒体となっていることを改めて認識しました。様々な分野の最先端で活躍なさっておられる先生方、事務の分野で教育学研究科・学部を支え作り上げて下さっている職員の方々、そして学生の皆さんの声が活字となって一つの場に集う「レター」は、たんなる情報提供誌を超えた、対話と交流の場であると思います。教育学研究科・学部でそれぞれのもてる力を発揮できたことの証を確認できるような、刺激的で真心のこもった「レター」をお届けできればと願います。（NS）



京都大学教育学研究科 ・ 教育学部広報委員会

- 委員長 松木 邦裕 教授（臨床心理実践学講座）
委員 辻本 雅史 教授（教育学研究科長・教育学部長）
委員 南部 広孝 准教授（比較教育政策学講座）
委員 齋藤 直子 准教授（臨床教育学講座）
委員 吉井 晃 事務長
委員 谷川嘉奈子 専門職員（総務掛長）
委員 西本 幸江 専門職員（教務掛長）

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛
TEL 075 (753) 3003